

「バーチャルにじーず」事業報告書

2024.3.31

一般社団法人にじーず

本報告書は、2023年度の「バーチャルにじーず」開催と、開催に至るまでのメタバース空間での居場所の設計やファシリテーションのあり方などに関するソフト面での運用手法の検討、その成果等についてまとめたものである。なお、本年度の「バーチャルにじーず」は、「LGBTの子ども・若者のオンラインでの居場所」の事業名で、令和5年度NPO等と連携したこどもの居場所づくり支援モデル事業として実施した。



1. 事業要旨

本事業は、若年層のLGBT当事者の孤独・孤立を解消することを目的に、メタバース空間上で当該層が安心して交流できるような居場所を構築・開催するというものである。LGBTの若年当事者を対象としたメタバースの交流事業は、日本語圏および英語圏で先行事例を検索したが、該当するサービスを見つけることはできなかった。そのため、本事業は2023年7月～12月までは、どのような空間設計やファシリテーションを行うことがLGBTの若年層にとって安全かつ快適であるのかを模索するために、実際に子ども・若者の声を聞きながらトライアル開催を重ねることになった。

なお、本事業は岡山大学の医療情報化診療支援技術開発講座の長谷井嬢准教授の協力を得ながら開催した。長谷井氏は骨肉腫の子ども患者を診ていく中で、長期入院を経験している子どもたちどうしをメタバースで繋ぐことで、子どもたちの孤立を防げるのではと考え実践している。長谷井氏はメタバース上での空間設計に詳しく、当団体が事業を組み立てる上でたくさんの有益な助言をいただいた。

2. 事業目的

若年層のLGBT当事者の孤独・孤立を解消することが本事業の目的である。若年層のLGBTは学校でも家庭でも本当の自分を表現できず、不安や孤立を抱えてしまう事例が少なくない。NPO法人ReBit「LGBTQの子ども若者調査2022」によれば孤独感を「しばしば」あるいは「常に」感じたと回答した12-19歳は、LGBTQの場合に29.4%であり、内閣府実施「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査」に比べて8.6倍も高かった。また同調査では、10代LGBTQの48%が自殺を考え、14%が自殺未遂を経験しており深刻な状況があることが示唆される。

当団体はこれまで全国約10都市で対面のLGBTの子ども若者の居場所事業を開催してきたが、当事者が安心して集まれる居場所は都市部に集中しており、地方在住の場合にはアクセスが難しい課題があった。メタバース空間の利用は、居住地の地域性を問わないために地方在住の当事者にとってはメリットが大きく、さらにメタバース空間では匿名性が担保された上で、アバターなど自由に外見を表現できることから、性別違和があり日頃、自分の望む姿で生活ができない若年当事者にとっては、アイデンティティの表現がしやすいと考えた。

対象年齢は13歳から23歳とした。これは利用するプラットフォーム「cluster」の規約などを参考に設定した。

3 事業の実施内容

2023年7月～12月までは、どのような空間設計やファシリテーションを行うことが、LGBTの若年層にとって安全かつ快適であるのかを模索するために、実際に子ども・若者の声を聞きながらトライアル開催を重ねることになった。

①トライアルの開催について

当団体では若年層のLGBT当事者の対面での居場所事業を全国約10都市で開催している。そのため、すでにつながっている子ども・若者が多数おり、本事業の趣旨について説明した上で、トライアル開催に協力してくれる人を募集した。

トライアル開催は8月26日、10月4日、11月18日、12月20日の4回実施し、合計17名(延べ人数)が参加した。

トライアル開催は、普段対面の居場所を開催している会場にパソコンやVRヘッドセットを持ち寄り、スタッフ立ち合いのもとで協力者にデバイス进行操作してもらったりやり方で始め、のちにオンラインで自宅から協力者に参加してもらったりやり方に移行した。

トライアル開催で判明したことは多かった。たとえばヘッドセットではなくスマホやPCから利用する人が多い中で、メタバース空間内にモノが多すぎると、アプリが重すぎて頻繁に落ちてしまう可能性があることがわかった。また「入り方がわからない」「音声の出し方がわからない」など技術的なサポートを必要とする人もいることがわかり、スタッフで対応を検討した。参加者とは当初メールでのやり取りを想定していたが、10代にとってはメールよりLINEの方が身近であること、技術的なサポートをリアルタイムで行う上でも利便性が高いことから、スタッフが複数人で管理できる公式LINEアカウントを作り、イベント開催中の困りごととは担当者を決めてサポートする体制とした。

安心できる場づくりのために、スタッフはオリジナルの猫型アバター「にじにゃん」の姿となり、参加者が何か相談したいときや困り事が起きたときにすぐ話しかけられるようにした。

大人のスタッフが威圧感を出さないために、にじにゃんは親しみやすい外見をしており、利用者が使う通常のアバターよりも低身長となっている。

メタバース空間でも、通常の居場所と同様に安全性のルールを参加者全員と共有することにし、メタバースに対応した内容にアレンジを行った。具体的には、音声の参加でもチャット参加でも良いこと、フレンド申請や連絡先交換の禁止(メタバース空間の機能により、対面イベントより簡単にできてしまうことや、対面の場合よりも断りにくいことが考えられた)、過度な露出や猥褻な表現、差別的な表現を行わないことなどを追記した。トライアルでは「楽しかった」「トランスジェンダーですが仮想空間内だけでも自認する性別のアバターでいられるのはとても良い。メタバースの最大の長所だと思います」「メタバース空間で遊ぶのは初めてでしたが、人と会っているような温かみがあって、とても楽しかったです」などの意見があった。

なお、2024年3月からは、外見だけではなく、声についても高さ・低さを利用者が自在に変更できるようになった。これは前述の長谷井氏が、本事業で使用しているメタバース・プラットフォーム「cluster」の運営会社にリクエストを行っていたものが、サービスとして採用された経緯がある。性別違和がある場合など、自分の外見や声にコンプレックスがあり他者との交流に抵抗を持つ人も少なくないが、メタバース空間ではそのような葛藤が薄れ、アイデンティティが表現しやすい利点がある(なお「バーチャルにじーず」では音声での交流も、チャットの交流もできる)。

当団体が最終的に構築したメタバース空間は2種類の部屋があり、一つはダーツ、オセロ、花火などが楽しめて、キッチンで飲み物も取れるという部屋である。もう一つは、さらに広い部屋で、ピアノやステージがあり、ビーズクッションなども置かれて広々としたタイプである。後者にはレインボーフラッグなど、アイデンティティをあらわすグッズもあり、自由に持つことができる。メタバースの空間が複数あることで、飽きがこないようにした。

さらに、広々とした部屋では今後、若年当事者たちが単にサービスの受け手ではなく、舞台のようなセットを置き、自分たちの思いを表現できる場所として活用できるような設計にもした。匿名性が担保できることから、普段の経験などを他の人に伝えたい子ども・若者にとっては、メタバースは意見表明権を安全に担保する良い場になると期待している。

② 公開の居場所「バーチャルにじーず」の実施について

トライアル開催を重ね、空間設計やファシリテーションのやり方について知見を重ねたので、2024年1月からは全国から参加者を募ってのメタバース上での居場所を開始した。名称は「バーチャルにじーず」で、対象年齢は13歳～23歳、全国どこからでも自宅から参加できることをうたい、広く広報を行った。東京新聞、山陽新聞、信濃毎日新聞、神奈川新聞などに掲載されたほか、ハフポストやOtemotoなどのウェブメディアにも告知記事が出た。年齢を限定したサービスであるため、初回利用者はZOOMを使った身分証の確認を行うこととした。また安全のためのルールも紹介するガイダンスの時間をとった。

4 実施結果と考察

「バーチャルにじーず」は2024年1月25日、2月22日、3月12日の20時～21時半に実施し、のべ16名の参加を得た。公開を始めたのが2024年1月からであるため、日本各地の若年当事者にサービスを届けるのは2024年度以降になる。それでも、現時点でサービスの利用者登録には北海道から沖縄、さらには海外まで、普段LGBTの若年層向けの居場所事業がないエリアからも申し込みがあり、地方在住者にとって魅力的であることが伺われた。さらには都内在住者であっても、対面の居場所よりもメタバースの方が良いと考える利用者があることもわかった。メタバースだとアバター参加で、声を変えたり、チャットで参加することもできるため、外見や声の印象から性的指向や性自認を決めつけられてしまうのではないかという不安も持たずに参加できる。これらの要素が、自身の性的指向や性自認を秘匿したいと考える当事者にとっては、便利なのかもしれない。また、不登校、引きこもりなど外出機会が少ない人にとっても、メタバースの方が利用しやすい人がいることが考えられる。

3回の実施の中でも、お互いのカミングアウトの状況や、男女で分かれている制服について、服をどこで買うか(トランスジェンダーなど性自認にあった服をどう選ぶかは、よく当事者間で話題に上がる)など、性別に関する事柄について話し合う場面があった。

普段の生活の中では、ほとんどカミングアウトしてない若者も参加していた。

感想としては「自分のありたい姿でいられて嬉しかった」「リアルの友達には言えないことが言えた」「気軽に参加できて話せる」などの意見があり、孤立防止の事業としてスタッフとしても手応えを得ることができた。_

本事業を開始するにあたり、LGBTの若年層に向けたメタバース空間上での交流の前例がないか日本語および英語で検索を行ったが、先行事例を見つけることができなかった。そのため、LGBT向けのメタバースの安全かつ快適性の高い居場所の運営手法を確立すること自体が、おそらくは世界で前例のない取り組みであり、社会的に意義のあることだったと考える。

LINEを組み合わせたテクニカルサポートや、スタッフをオリジナルアバターにすることで安全性の担保など、今後ほかの子ども若者支援団体がメタバースを活用した居場所事業を実施するに当たっても、参考にしてもらえる点が多かったので、「バーチャルにじーず」の取り組みを知ってもらう機会を広く今後も作っていきたい。

6 成果の公表方法

HPへの公表、公開イベントの実施(2024年度内)